

## 比較「思想」から見た密教研究

種村 隆元

はじめに

筆者に与えられた課題は「比較思想としての近代仏教学」というテーマのもと、「密教（あるいは、タントラ仏教 [Tantric Buddhism]）」の研究に関して述べることである。しかしながら、最初に断っておかなければならないのは、密教を特徴付けるもの、すなわち密教と他の伝統的な仏教を区別する特徴となるものは思想ではなく<sup>①</sup>、ある特定の宗教的ゴール（解脱や現世利益など）を得るための実践であり、それに付随する教理や理論は二義的なものであるという点である<sup>②</sup>。すなわち、密教の実践者たちにとっては、密教の実践が異教徒的なものであるとの批判を受けるものであったとしても、その実践を支える教理はあくまでも「中観」や「唯識」といった、伝統的な教学にもとづくものであったからである<sup>③</sup>。したがって、この小論では「比較思想」という単語を使用しつつも、ある思想に支えられた行動様式としての宗教実践についての話に

なることをご寛恕頂きたい。

密教は先述の通り、その実践によりそれまでの伝統的な仏教と区別される一方で、インド中世初期に隆盛を誇った「タントラ（あるいはタントリズム）」という宗教潮流あるいは宗教運動の中に位置づけられる仏教の一形態である。タントラを特徴づけるものは、これも前述の繰り返しになるが、秘儀をともなつた実践体系であり、タントラの宗教はこの実践体系が伝統的な宗教、すなわち仏教にとつては既存の大乗仏教、いわゆるヒンドゥー教のタントラ（シヴァ教がその代表格）にとつてはヴェーダの宗教よりも迅速に宗教的な目的を達することを説いている点である。そして、密教を含むタントラ実践に共通する事項としては、①これまでの伝統的なヨーガと異なり、新しいスタイルのヨーガが説かれていること、②そのヨーガはマントラ（真言）、ムドラー（印）、マンドラなどを使用すること、そしてその実践は、③儀礼的な性格が極めて濃い、といったことが挙げられる。

密教といわゆるヒンドゥー教のタントラの類似性はこれまでも指摘されていたことであるが、ここ三〇年ほどの間に見られる研究の劇的な進展により、その類似性が具体的な形で提示されてきている。この研究の進展の主たる要因は、カトマンドゥ盆地等に現存する写本の解説を通して、タントラの宗教の内容を具体的に知りうるようになったことである。また、写本等の文献資料のみならず、碑文等の考古学的資料など、文献以外の資料の研究が進展していることも付け加える必要があるであろう。

以下、このような諸資料にもとづく「比較」により、ここ三〇年ほどで明らかになってきた密教とヒンドゥー教のタントラ、とりわけシヴァ教との類似点を紹介することにした。

## 「比較」から見た密教とシヴァ教

### 1 テキストの貸借関係

密教とシヴァ教との関係に関して、新たなパラダイムを提示し、その研究の段階を引き上げたのがアレクシス・サンダーソン (Alexis Sanderson) の一九九四年の論文 *Vajrayana: Origin and Function* である。当該論文においてサンダーソンは、密教とシヴァ教の両者に見られる類似性が、前者の後者への依存によるものであるという議論を提示し、研究者の間に活発な議論を引き起こした。

サンダーソンは、二〇〇〇年代に発表した諸論文、中でも大著 *The Saiva Age: The Rise and Dominance of Saivism During the Early Medieval Period* (2009) に於いて、後期密教經典のサンヴァ

ラ系經典群の主要經典とみなされる『ラグシャンヴァアラタントラ』のテキストのかなりの部分が、シヴァ教の「ヴィドゥヤーピータ」という聖典群に分類される聖典のテキストの借用であることを、具体的な証拠を示しつつ、指摘している(二八六頁以降)。簡潔に、具体的な一例を挙げてみることにする。『ラグシャンヴァアラタントラ』第一章第二五偈と第四章第一偈とシヴァ教タントラの『ヨーギニーサンチャーラ』第八章第三偈と第二八偈のテキストはパラレルな関係にある。両文献の当該箇所を見ると、シヴァ教側では当該箇所の文脈が一致しているのに対し、仏教側では文脈が取れず、意味不明瞭な箇所が多く見られる。これは、仏教側がシヴァ教聖典のテキストを剽窃し、文言を加え、表面的に編集した結果としておこったことである、というのがサンダーソンの議論の趣旨である。

具体的な剽窃の証拠の例は以下の通りである。『ラグシャンヴァアラタントラ』第三章第四偈に「ブトラカ」という語が見られるが、これはシヴァ教の専門用語で、特定の種類の入門者のことを指しているが、密教においてこの「ブトラカ」という用語が使用されることはない。また、当該箇所は灌頂儀礼の規定を述べている箇所であるが、『ラグシャンヴァアラタントラ』の説く灌頂の説明に、密教の歴史を通して標準化されてきた、瓶灌頂から般若智、第四灌頂にいたる灌頂次第が全く説かれていない。結果として、ジャヤパドラやバヴァバッタといった註釈者は、かなり無理をして『ラグシャンヴァアラタントラ』の当該箇所に、それらの灌頂を読み込もうとしている。

## 2 聖典の階層的分類に関する類似<sup>⑤</sup>

密教は五世紀から一三世紀にいたる八〇〇年余りの間、その実践を規定する聖典（密教経典）を生み出してきた。シヴァ教も事情は同じで、様々な種類の聖典が編纂されてきた。この長期間に編纂された聖典は膨大な数にのぼり、その結果として両宗教ともに聖典の階層的分類がなされてきた。

密教経典は、それを五種類にわけける五分法に従えば、①クリヤー（所作）タントラ、②チャルヤー（行）タントラ、③ヨーガタントラ、④ヨーガ・ウッタラタントラ、⑤ヨーガニルタラタントラ、に分類される。この①～⑤は密教の歴史的發展段階にほぼ対応する。また、③～⑤は全体として広義のヨーガタントラに分類される。また、①から⑤に行くに従って秘儀的レベルが高くとされた。また、広義のヨーガタントラの内部では、③のヨーガタントラは、後代になると、一定の限られた効力を有する「一般的な」タントラとみなされるようになった。<sup>⑥</sup>

タントラのシヴァ教の場合も同様である。まず、シッダーンタと非シッダーンタに二分される。後者はさらに、マントラピータとヴィドゥヤーピータという聖典群に分類される。そして、後者にはさらにヴァーマスロータス、ヤーマラタントラ、トリカ、カリークラーといった聖典群に分類される。シヴァ教においても、註釈者たちは、この聖典の分類に沿う形で、シッダーンタと非シッダーンタのグループがあり、前者がシッダーンタの聖典が最高であり、他の聖典は二次的なものであるとする。一方で、非シッダーンタのグループは、シッダーンタの聖典を基礎的な権威とみなし、

自らの聖典をエリートのため  
の最高の聖典とみなした。こ  
のような聖典の階層的分類に  
おいては、下位のもののほど万  
人が実践可能であり、上位の  
ものほど実践する人間を限定  
した。

以上のように、密教もシヴァ教においても経典・聖典の階層的な分類を行い、経典・聖典のレベルが上がるほど、秘儀的性格が増し、実践する人を限定するというモデルを作り上げたのである。また、両宗教に共通する事項として、それまでの伝統的な宗教あるいは実践体系との関係を挙げるができる。シヴァ教は自らの聖典が伝統的なヴェーダ聖典を超えるものであるとみなす一方で、ヴェーダの宗教をその下部構造に組み入れた。密教も同じく密教経典が伝統的な大乘仏教を超え

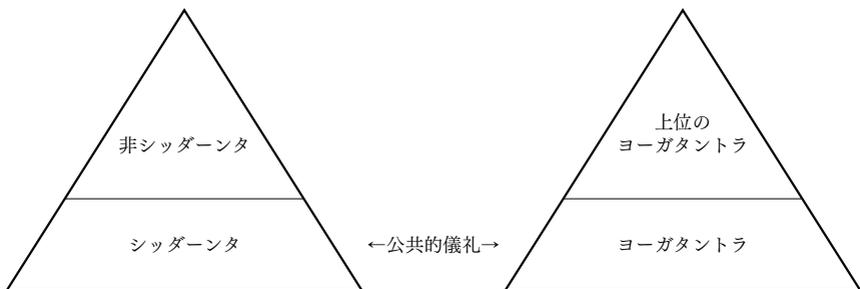


図 シヴァ教と密教の階層的構造と公共儀礼

る特別な経典とみなす一方で、伝統的な大乘仏教に一定の有効性を認め、その下部構造に組み入れたのである。

さて、密教経典、シヴァ教聖典ともに、その主たるトピックはその宗教に入門した者たちが行うべき実践や宗教的義務などである。それはいわば入門者個人の宗教的目的——それが解脱であれ現世利益的なものであれ——の達成のために行われるものであった。その一方で、密教、シヴァ教ともに（前者が後者をモデルにして）、公共的な儀礼、すなわち施主の要望によりその宗教的目的を達成するための儀礼を整備していった。シヴァ教におけるこのような公共儀礼を担ったのが前述したシッターンタというグループであり、非シッターンタのグループから見ても、秘儀性の低い、より一般の人々がアクセスできる体系である。一方、『所作集註』という文献によるならば、密教においてこのような公共儀礼に適用されたのが『金剛頂経』所説の「金剛界大マンダラ」の体系（＝ヨーガタントラの体系）であり、後代において秘儀性の高くない「一般的」とみなされるようになった体系である。前述の経典・聖典の階層的分類は、単純に理念的なものではなく、実践の場においても見られる構造なのである（図を参照）。

#### おわりに

以上述べてきたように、インド密教およびタントラの分野では近代仏教学が依拠する文献学的方法により、異なる宗教の文献を比較検討することにより、タントラの諸宗教の具体的な関係が徐々に明らかにされつつあり、これらの宗教がインドのみならず、

東アジアにまでいたる広大な地域におよぼした影響についても研究の目が向けられている。この小論においては、密教とシヴァ教の類似点に関して、若干の紹介をおこなったが、これらの宗教の特質を理解するためには、これらの類似点の中にどのような異なる点があるのかが検討されなければならない。それは「異なる点」にこそ、その宗教をその宗教たらしめている本質が現れていると考えられるからである。この点は、当該研究分野における今後の課題であらう。

#### 参考文献

- 久間泰賢「後期瑜伽行派の思想―唯識思想と外界实在論との関わり」『唯識と瑜伽行・シリーズ大乘仏教7』春秋社、二〇二二年、二二二―二五三頁。  
服部正明・上山春平『認識と超越』唯識』角川書店、一九七〇年。  
種村隆元「密教の出現と展開」『新アジア仏教史02 インドII 仏教の形成と展開』佼成出版社、二〇一〇年、二〇九―二六三頁。  
種村隆元「密教とシヴァ教」『大乘仏教のアジア：シリーズ大乘仏教10』春秋社、二〇一三年、七三―一〇二頁。  
種村隆元「インド密教の実践からみたマンダラ：マンダラ図像理解の一助として」『廣澤隆之監修・武内孝善責任編集』曼荼羅集 下 興然編』同朋舎新社、二〇一九年、二八〇―三〇二頁。  
Goodall, Dominic and Harunaga Isaacson, "On the Shared 'Ritual Syntax' of the Early Tantric Traditions." In: Dominic Goodall and Harunaga Isaacson (eds.) *Tantric Studies: Fruits of a Franco-German Project on Early Tantra*, Institut Français de Pondichéry / École française d'Extrême-Orient / Asien-Afrika-Institut, Universität Hamburg, 2016, pp.1-76.  
Isaacson, Harunaga and Francesco Serra, "Tantric Literature: Overview South Asia." In: Jonathan A. Silk et al. (eds.) *Brill's Encyclopedia of Buddhism, Volume One: Literature and Languages*, Leiden / Boston: Brill,

2015, pp.307-319.

Sanderson, Alexis, "Vajrayāna: Origin and Function." In: *Buddhism into the Year 2000: International Conference Proceedings*, Bangkok / Los Angeles: Dharmarakaya Foundation, 1994, pp.87-102.

Sanderson, Alexis, "The Saiva Age: The Rise and Dominance of Saivism During the Early Medieval Period." In: Shingo Einoo (ed), *Genesis and Development of Tantrism*, Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, 2009, pp.41-349.

- (1) これに関しては、たとえば「マンダラに表された密教独特の思想があるのではないか」との反論も予想される。しかしながら、マンダラの思想に関しても、註釈家はマンダラが「菩提心」「最高真理」などを表象するものであり、マンダラに描かれる樓閣宮殿やそこに住する尊格は、仏教教理——この場合の仏教教理はアビダルマ等の伝統的な教理にもとづくものである——を象徴するものであるとする。したがって、「マンダラの使用」は密教に特徴的なものではあるが、そこに読み込まれる思想はそれまでの伝統的な教理にもとづいているのである。このようなマンダラの意味づけに関しては、たとえば、種村 2019 を参照。
- (2) この点は、アレクシス・サンダーソンが Sanderson 1994 において、「マントラ」という語を、主として「密教とその他の仏教を区別する宗教的実践」を述べるものとして使用しており、その区別に関しては、救済論的教理は「二義的なものであり、さらに、実践者のゴールとなる「最高真理」「最高存在」に関する特定の理論に関しては、ほとんど区別がつかないもの」と述べている通りである (Sanderson 1994: 88)。
- (3) 密教のもつ異教徒的な実践を伝統的な仏教教理で意味づける過程において、「中観」や「唯識」といった思想が大乗仏教の枠組みの中に取り込まれていったことも、密教のもつ大きな特徴である (服部・上山 1970: 20-21、久間 2012: 247-248)。このような教理の体系化の過程で、アドヴァヴァアジラ「真理の宝環」のような教理綱要書が作成されたこととは注目し値する。

(4) このような各宗教に共通したタントラの特徴については、Goodall and Isaacson 2016 を参照された。

(5) より詳しくは種村 2013 を参照のこと。

(6) 密教経典の分類については Isaacson and Sierra 2015 を参照のこと。また、これまでの二次文献に見られる密教経典の分類に関する問題点については、種村 2010 を参照のこと。

(7) Sanderson 2009: 124-127 参照。このような儀礼の代表的なものがプラティシユターと呼ばれる、仏像・神像や寺院などを奉納する儀礼である。シヴァ教はこの種類の儀礼を規定する「プラティシユタータントラ」と呼ばれる聖典群や「パツダティ」と呼ばれる儀礼マニュアルを整備した。一方、密教も儀礼マニュアル類でプラティシユター儀礼を規定した。密教側が「プラティシユタータントラ」に相当する経典群を編纂したこととは、管見の限り確認されない。

(たねむら・りゅうげん、仏教・インド密教、大正大学教授)